

二、三羽——十二、三羽

泉鏡花

青空文庫

引越しをするごとに、「雀すずめはどうしたろう。」もう八十幾いくつで、耳が遠かった。——その耳を熟じつと澄ますようにして、目をうつとりと空を視ながめて、火桶ひおけにちよこんと小さくいて、「雀はどうしたろうの。」引越しをするごとに、祖母のそう呟つぶやいたことを覚えている。「祖母おばあさん、一いっしょ所に越して来ますよ。」当てずツぽに氣安めを言うのと、「おお、そうかの。」と目皺めじわを深く、ほくほくと頷うなずいた。

そのなくなつた祖母は、いつも仏ほとけの御飯の残りだの、洗いながしのお飯まんまつぶ粒つぶを、小窓に載せて、雀を可愛かわいがつていたのである。私たちの一いっこう向に氣のない事は——はれて雀のものがたり——

そらで嵐雪らんせつの句は知つていても、今朝も囀さえずつた、と心に留とめる
ほどではなかつた。が、少すくからず愛惜あいじやくの念を生じたのは、お
なじ麴こうじまち町だが、土手三番町どてさんばんちように住すまつた頃であつた。春も深く、
やがて梅雨つゆも近かつた。……庭に柿の老樹が一株。遣放やりばなしに手
入れをしないから、根まわり雑草の生えた飛石とびいしの上を、ちよこ
ちよことよりは、ふよふよと雀が一羽、羽を拡げながら歩行あるいて
いた。家内がつかつかと跣足はだしで下りた。いけずな女で、確たしかに小雀
を認めたらしい。チチチチ、チュ、チュツ、すぐてのひらに掌の中に入うぐいすつた。
「引ひつつか搦いけなんじや不可いけない、そつとそつと。」これが驚うぐいすか、かな
りやだと、伝統的にも世間体にも、それ鳥籠とりかごをと、内うちにはない
から買といに出る処ところだけれど、対手あいてが、のりを舐なめる代しろもので、お

安く扱われつけているのだから、台所の目簀めざるでその南の縁えんへ先ず
 伏せた。——ところで、生掬いけどつて籠に入れると、一時ひとときと経たたな
 いうちに、すぐに薩摩芋さつまいもを突つついたり、柿を吸すつたりする、目
 白鳥じろのように早く人馴れをするのではない。雀の児こは容易たやすく餌えに
 つかぬと、祖母にも聞いて知っていたから、このまだ草にふらつ
 いて、飛べもしない、ひよわなものを、飢えさしてはならない。
 ——きつと親雀が来て餌えを飼かおう。それには、縁えんでは可恐こわがるだ
 ろう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥ははどりは直ぐに来て飛びついた。もう先刻さつきから庭樹にわきの間を、け
 たたましく鳴きながら、あっちへ飛び、こっちへ飛び、飛騨とびさわい
 でいたのであるから。

障子しょうじを開けたままで覗のぞいているのに、仔この可愛さには、邪険

な人間に対する恐怖も忘れて、目筈の周囲を二、三尺、はらはらくるくると廻まわつて飛ぶ。ツツと筈ざるの目へ嘴はしを入れたり、颯さつと引いて横に飛んだり、飛びながら上へ舞まい立ったり。そのたびに、筈の中の仔雀のあこがれようと言つたらない。あの声がキイと聞えるばかり鳴き絶すがつて、引切ひっきれそうに胸毛を震わす。利かぬ羽を渦うずにして抱きつこうとするのは、おつかさんが、嘴はしを筈の目に、その……ツツと入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな餌えを、虫らしい餌を、親くちばしくわは嘴に銜くわえているのである。筈の中には、乳離ちばなれをせぬ嬰児あかんぼだ。火のつくように泣立なきたてるのは道理である。ところで筈の目を潜くぐらして、口から口へ哺くぐ

めるのは——人間の方でもその計略だったのだから——いとも容^や易^さい。

なのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつつ身を退^ひいて飛^と廻^びるのは、あまり利口でない人間にも的確に解せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うまうまをあげましょう、其^{そこ}処^こを出ておいで。」と言うのである。他^{ひと}の手^てに封^{ふう}じられた、仔^こはどうして、自分で箒^{はき}が抜^ぬけられよう？ 親^{お母}はどうして、自分で箒^{はき}を開^{ひら}けられよう？ その思^{おも}い^いはどうだろう。

私たちは、しみじみ、いとしく可愛くなつたのである。

石も、折^{おり}箱^{ばこ}の蓋^{ふた}も撥^は飛^ねばして、箒^{はき}を開^{ひら}けた。「御免よ。」

「御免なさいよ。」と、雀の方より、こつちが顔を見合わせて、

悄しよ氣きげつつ座敷へ引ひ込んだ。

少々きまり極きまりが悪くつて、しばらく、背戸せどへ顔を出さなかつた。

庭下駄にわげたを揃そろえてあるほどの所帯ではない。玄関の下駄ひつまを引抓

んで、晩方ばんがた背戸へ出て、柿こずえの梢の一つ星を見ながら、「あの雀

はどうしたろう。」ありたけの飛石——と言つても五つばかり—

—を漫そぞろに渡ると、湿しけた窪地くぼちで、すぐ上しのぶが葱こけりや苔ゆうひげ、竜ひげの髯ひげの石垣

の崖がけになる、片隅やまぶきに山吹やまぶきがあつて、こんもりした躑躅つづじが並んで

植うつていて、垣きどなりの灯ひが、ちらちらと透すくほどに二、三輪咲さ

残きのこつた……その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一

羽、たよりなげに宿つていた。正まさに前刻さつきの仔に違ちがひない。：様子

が、土から僅わずか二尺ばかり。これより上へは立てないので、ここ

まで連れて来た女親が、わりのう預けて行つたものらしい……
 敢て預けて行つたと言いたい。悪戯を詫びた私たちの心を汲ん
 だ親雀の気の優しさよ。……その親たちの塹は何処？……この嬰
 児ちゃんは寂しそうだ。

土手の松へは夜鷹が来る。築土の森では木兎が鳴く。……折か
 ら宵月の頃であつた。親雀は、可恐いものの目に触れないよう
 に、なるたけ、葉の暗い中に隠したに違いない。もとより藁屑
 も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼつと、
 その仔雀の身に添つて、霞のような気が籠つて、包んで円く明か
 ったのは、親の情の臍氣ならず、輪光を顕わした影であろう。
 「ちよつと。」「何さ。」「手招ぎをして、」来て見なよ。」家内

を呼^{よびだ}出して、両方から、そつと、顔を差^{さしよ}寄せると、じつとしたのが、微^{かすか}に黄色な嘴^{くちばし}を傾けた。この柔^{やわらか}な胸毛の色は、さし覗^{のぞ}いたものの襟^{えり}よりも白かった。

夜ふかしは何、家業のようだから、その夜はやがて明くるまで、^{のらねこ}野良猫に注意した。彼奴^{きやつ}が後足^{あとあし}で立てば届く、低い枝に、預^{あずか}つたからである。

朝寝はしたし、ものに紛^{まぎ}れた。午^{ひる}の庭に、隈^{くま}なき五月の日の光を浴びて、黄金^{おうごん}の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑^{つじ}躑、山吹の上下^{うへした}を、二羽縦^{じゆう}横^{おう}に飛んで舞っている。ひらひら、ちらちらと羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹^{くさじき}の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習う、仔の翼は、次第に、

次第に、上へ、上へ、自由に軽くなって、卯の花垣はながきの丈を切るたけのが、四、五度たび馴れると見るうちに、崖がけをなぞえに、上町うわまちの樹の茂りの中へ飛んで見えなくなつた。

真綿を黄に染めたような、あの翼が、こう速すみやかに飛ぶのに馴れるか。かつ感じつつ、私たちは飽かずに視ながめた。

あとで、台所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁こえんに、行ったり、来たり、出入りではいするのは、五、六羽、八、九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

——二、三羽、五、六羽、十羽、十二、三羽。ここで雀たちの数を言つたついでに、それぞれの道の、学者方までもない、ちよつとわけ知りの御人ごじんに伺うかがいたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では余り沢山たくさんには殖えないものなのであろうか知ら？ 御存じの通り、稲塚いなづか、稲い田なだ、粟あわきび黍びの実る時は、平家へいけの大軍を走らした水鳥みずどりほどの羽音はおとを立てて、驟なわてゆ行き、畔あぜゆ行くものを驚かす、夥おびただ多だしい群団むれをなす。鳴子なるこも引板ひたも、半ば——これがための備そなえだと思う。むかしのもの語がたりにも、年としつき月の経ふる間には、おなじ背戸せどに、孫ひこも彦むらも群がるはずだし、第一むくどり棕鳥ねぐらと塒ねぐらを賭けて戦う時の、雀の軍勢ちつを思いたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些ちつと家族が栄えようと思うのに、十年一日と言うが、実際、——その土手三番町どてさんばんちやうを、やがて、いまの家へ越してから十四、五年になる。——あの時、雀の親子ななけの情に、いとしさを知って以来、申出るほどの、さ

したる御馳走でもないけれど、お飯粒まんまつぶの少々は毎日欠かさず撒まいて置く。たとえば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」……だけは、留守へ言つて置くくらいだが、さて、何年にも、ちよつと来て二羽三羽、五、六羽、総勢すぐつて十二、三羽より数が殖えない。長者でもないくせに、俵たわらで扶持ふちをしないからだ、言われればそれまでだけれど、何、私だって、もう十羽殖えたぐらいは、それだけ御馳走を増すつもりでいるのに。

何も、雀かこつに託たくけて身しん代しょうの伸びない愚痴ぐちを言うのではない。また……別に雀の数の多くなる事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五、六羽ずつは親の連れて来

る子の殖えるのが分っているから、いつも同じほどの数なのは、
何処どこへ行つて、どうするのだらうと思うからである。

が、どうも様子が、仔雀が一羽だちの出来るのを待つて、その
小児こどもだけを宿に残して、親雀は塹ねぐらをかえるらしく思われる。

あの、仔雀が、チイチイと、ありツたけ嘴くちばしを赤く開けて、クリ

スマスに貰もらったマントのように小羽を動かし、胸毛をふよふよと
揺ゆるがせて、こう仰向あおむいて強請ねだると、あいよ、と言つた顔色かおつきで、

チチツ、チチツと幾度いくたびもお飯まんま粒つぶを嘴くちばしから含めて遣やる。……

食べても強請ねだる。ふくめつつ、後あとねだりをするのを機掛きっかけに、一

粒銜くわえて、お母つかさんは堀へいの上——（椿つばきの枝下えだしたで茲ここにお飯まんまが置い

てある）——其処そこから、裏露地を切つて、向うの瓦屋根かわらやねへフツ

と飛ぶ。とあとから仔雀がふわりと縋る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢の高さぐらゐに舞上ると、その胸のあたりへ附着くように仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞いつつ、飛びつつ、庭中を翔廻りなどもする、やっぱり羽を馴らすらしい。この舞踏が、一齊に三組も四組もはじまる事がある。卯の花を搔乱し、萩の花を散らして狂う。……かわいいのに目がないから、春も秋も一所だが、晴の遊戯だ。もう些と、綺麗な窓掛、絨毯を飾つても遣りたいが、庭が狭いから、羽とともに散りこぼれる風情の花は沢山ない。かえつて羽について来るか、嘴から落すか、植えない堇の紫が一本咲いたり、蓼が穂を紅らめる。

ところで、何のなかでも、親は甘いもの、仔はずるく甘ツたれるもので。……あの胸毛の白いのが、見ていると、そのうちに立派に自分で餌えが拾えるようになる。澄ました面つらで、コツンなどと高慢に食べている。いたずらものが、二、三羽、親の目を抜いて飛んで来て、チュツチュツチュツとつき合あいの喧嘩けんかさえ遣やる。生意まいき気にもかかわらず、親雀あかんぼこえがスーッと来て叱しかるような顔を見ると、喧嘩くちばしの嘴くちばしも、生意あかんぼこえ気な羽も、忽たちまちぐにやぐにやになって、チイチ、赤坊声あかんぼこえで甘うまうまったれて、餌えを頂戴うまうまと、口を張開はりひらいて胸毛をふわふわとして待構まちかまえる。チチツ、チチツ、一人でお食べなど言つても肯きかない。頬ほっぺた辺を横に振つても肯きかない。で、チイチイチ……おなか为空いたの。……おお、よちよち、と言つた工

合に、この親馬鹿が、すぐにのろくなつて、お飯粒まんまつぶの白い処ところを——贅ぜいたく沢な奴らで、内うちのは挽割ひきわり麦まを交ぜるのだがよほど腹がすかないと麦の方へは嘴はしをつけぬ。此奴らこいつ、大地震の時は弱つたぞ——啄つばんで、嘴はしで、仔の口へ、押込み揉込むようにするのが、およたま凡そ堪らないと言つた形で、頬摺ほおずりをするように見える。

怪けしからず、親に苦勞を掛ける。……そのくせ、他愛たわいのないもので、陽氣がよくて、お腹なかがくちいと、うとうととなつて居睡いねむりをする。……さあさあ一きり露台ひと みはらしへ出ようか、で、塀の上から、揃そろつてもの干へ出たとお思いなさい。日のほかほかと一面に当る中に、声は噪はしやぎ、影は踊る。

すてきに物干ものほしが賑にぎやかだから、密そつと寄つて、隅の本箱の横、二にかい

階裏うらの肘掛窓ひしかけまどから、まぶしい目をぱちくりと遣やつて覗のぞくと、

柱からも、横木からも、頭の上の小廂こびさしからも、暖あたな影かげを湧わかし、

羽を光らして、一いつ斉ときにパツと逃げた。——飛ぶのは早い、裏うら

邸しきの大枇杷おおびわの樹までさしわたし五十間けんばかりを瞬またたく間もない。

——（この枇杷の樹が、馴染なじみの一家族ねぐらの塹えんなので、前通りの五本

ばかりの桜の樹ありしま（有島家）にも一ひと群むれ巢を食っているのである

が、その組は私の内へは来ないらしい、持場が違ちがうと見える）——

——時に、女中がいけぞんざいに、取込とりこむ時引外ひきはすしたままの掛かけざ

棹おが、斜はす違かいに落ちていた。硝子がらす一重ひとえすぐ鼻さきの前に、一羽可愛かわい

いのが真ま正しょう面めんに、ぼかんと留とまつて残のこっている。——どうか

して、座敷へ飛込とびこんで戸惑とまいするのを掴つかえると、掌てのひらで暴れるから、

このくらい、しみじみと雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一つずつ日光を吸込^{すいこ}んで、おお、お前さんは飴^{あめ}で出来ているのではないかい、と言いたいほど、とろんとして、目を眠っている。道理こそ、人の目と、その嘴^{はし}と打撞^{ぶつか}りそうなのに驚きもしない、と見るうちに、踏^{ふま}えて留^{とま}った小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて迂^{すべ}りかかると、その時はビクリと居直^{いなお}る。……煩^{わづら}って動けないか、怪我^{けが}をしていないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州^{そうしゅう}逗子^{うずし}に住^{すま}った時（三太郎^{さんたろう}）と名づけて目白鳥^{めじろ}がいた。

桜山^{さくらやま}に生れたのを、おとりで捕った人に貰^{もら}ったのであった。

が、何処どこの巢ねにいて覺おぼえたらう、鶉ひよ、駒鳥こまどり、あの辺にはよくい
 る頬白ほおしろ、何でも囀さえずる……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、
 あきらうぐいす
 明かに鶯あきの声を鳴いた。目白鳥としては駄鳥だちようかどうかは知らな
 いが、私には大の、ご秘蔵——長屋の破やぶれのき軒きに、水を飲ませて、
 芋いもで飼ったのだから、笑つて故わざと（ご）の字をつけておく——ま
 たよく馴なれて、殿様が鷹たかを据すえた格かくで、掌てのひらに置いて、それと見せ
 ると、パツと飛んで虫を退治たいじた。また、冬の日のわびしさに、紅べ
 につばき
 椿つばきの花を炬燵こたつへ乗せて、籠を開けると、花を被かぶつて、密を吸
 いて、くちばしくちばしまつきいろ
 いつつ嘴くちばしを真黄色まつきいろにして、掛蒲団かけぶとんの上を押廻おしまわった。三味線さみせん
 を弾いて聞かせると、音ねに競きそつて軒たかさえずで高たかさえず囀さえずりする。寂しい日
 に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛

いもので。……可愛いにつけて、断じて籠には置くまい。秋雨あきさめ

のしよぼしよぼと降るさみしい日、無事なようにと願い申して、

いわとのでら

かんおん

わづら

岩殿寺の観音の山へ放した時は、煩わづらつていた家内と二人、悄し

ようぜん

こずえ

さかさか

然として、ツイーツイーと梢を低く坂下りに樹を伝つて慕した

い寄る声を聞いて、ほろりとして、一人は袖そでを濡らして帰った。

が、——その目白鳥の事で。……（寒い風だよ、ちよぼ一風いちかぜは、

しわりごわりと吹いて来る）と田越村たごえむら一番の若衆わかいしゅうが、泣声

を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風ならいの烈しい夕暮に、

いそがしいのと、寒いのに、向うみずに、がたりと、門かどの戸をし

めた勢いきおいで、軒に釣った鳥籠をぐわたり、ボタンと撥返はねかえした。ア

ツと思うと、中の目白鳥は、羽ばたきもせず、横木を転げて、落

葉の挟はさまったように落ちて縮んでいる。「しまった、……三太郎が
 目をまわした。」「まあ、大変ね。」と擗たすきがけのまま庖ほう丁うちょうを、
 投げ出して、目白鳥を掌てのひらに取って据えた婦おんなは目に一杯涙を溜ためて、
 「どうしましょう。」そ、その時だ。こころみちようずばち試こころみちようずばちに手水鉢の水を柄杓ひしやく
 で切つて霰しずくにして、露にして、目白鳥の嘴くちばしを開けて含まして、襟えり
 をあけて、膚はだにつけて暖めて、しばらくすると、ひくひくと動き
 出した。ああ助たすかりました。御利益ごりやくと、岩いわ殿とのの方かたへ籠を開いて、
 中へ入れると、あわれや、横木へつかまり得ない。おつこちるの
 が可こ恐わいのか、隅ぐもの、隅ぐもの、狭い処ところで小ちくなつた。あくる日一日
 は、些ちと、ご惱のう氣けと言つた形で、摺すり餌えに嘴くちばしのあとを、ほんの筋ほ
 どつけたばかり。但ただし完全に蘇よみがえ生なつた。

この経験がある。

水でも飲まして遣^やりたいと、障子を開けると、その音に、怪^け我^が処^{どころ}か、わんぱくに、しかも二つばかり廻^{まわ}つて飛んだ。仔雀は、う

とりうとりと居^い睡^{ねむり}をしていたのであつた。……憎^{にく}くない。

もつと

尤もなかなかの悪^{いた}戯^{ずら}もので、逗^{ずし}子の三太郎……その目白鳥――

―がお茶の子だから雀の口真^{くちまね}似をした所^せ為^いでもあるまいが、日^ひ向^{なた}

の縁^{えん}に出して人のいない時は、籠のまわりが雀どもの足跡だらけ。

秋^{あき}晴^{ばれ}の或^{ある}日^ひ、裏庭の茅^{かやぶき}葺^き小屋の風呂の廂^{ひさし}へ、向^{むか}うへ桜^{さくら}山^{やま}

を見せて掛けて置くと、午^{ひる}少^{ずか}し前の、いい天気で、閑^{しずか}な折から、

雀が一羽、……丁^{ちよう}ど目白鳥の上の廂^{ひあわい}合^{あい}の樋^{とい}竹^{だけ}の中へすぽりと

入^{はい}つて、ちよつと黒い頭だけ出して、上から籠^{のぞきこ}を覗^{のぞ}込む。嘴^{はし}に

小さな芋虫いもむしを一つ銜くわえ、あっち向いて、こっち向いて、ひよい
 ひよいと見せびらかすと、籠の中のは、恋人から来た玉章たまずさほど
 に欲しがって駈上かけあがり飛上とびあがって取ろうとすると、ひよいと面かおを
 横にして、また、ちよいちよいと見せびらかす。いや、いけずな
 お転婆てんばで。……ところがはずみに掛かつて振った拍子ひょうしに、その芋
 虫をポタリと籠の目へ、落したから可笑おかしい。目白鳥は澄まして、
 ペロリと退治たいじた。吃惊びつくり仰天ぎょうてんした顔をしたが、ぽんと樋との口を
 つきだ
 突出つきだされたように飛んだもの。

瓢箪ひょうたんに宿る山雀やまがら、と言う謡うたがある。雀は樋の中がすきら
 しい。五、六羽、また、七、八羽、横にずらりと並んで、顔を出
 しているのが常である。

あるとの
或殿が領分巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床几を据え
ると、背戸畑せとばたけの梅の枝に、大な瓢箪おおきが釣つるしてある。梅見うめみと言う
時節でない。

「これよ、……あの、瓢箪は何に致すのじやな。」

その農家の親仁おやしが、

「へいへい、山雀の宿にござります。」

「ああ、風情ふぜいなものじやの。」

能の狂言の小舞こまいの謡うたいに、

いたいけしたるものあり。張子はりこの顔や、練稚児ねりちご。しゆくし

や結びに、ささ結び、やましな結びに風車かざぐるま。瓢箪に宿

る山雀くるみ、胡桃くるみにふける友鳥ともどり……

「いまはじめて相分あいわかった。——些少ちとじやが餌えりの料りょうを取らせよう

。」

こはるうららか
小春の麗な話がある。

御前ごぜんのお目にとまつた、謡うたいのままの山雀は、瓢箪ひょうたんを宿とする。

こちとらの雀は、棟割長屋むねわりながやで、樋竹といだけの相借家あいじやくやだ。

腹が空くと、電信の針がねに一座ずらりと出て、ぽちぽちぽちなかぞら

と中空高く順に並ぶ。中でも音頭取おんどとりが、電柱の頂辺てっぺんに一羽とま
留とまつて、チイと鳴く。これを合図あひづに、一斉いっせきにチイと鳴出す。――

――塀へいと枇杷びわの樹の間に当つて。で御飯ごはんをくれろと、催促そそをするのである。

私が即すなわち取次いで、

「催促てるよ、催促てるよ。」

「せわしないのね。……煩いよ。」

などと言いながら、茶碗に装つて、婦たちは露地へ廻る。これ

がこのうえ後おくれると、勇悍ゆうかんなのが一羽押寄おしよせる。馬に乗つた勢

で、小庭を縁側えんがわへ飛上とびあがつて、ちよん、ちよん、ちよんちよん

と、雀あるきに扉ひらきを抜けて台所へ入つて、お竈へつの前を廻るかと思

うと、上の引窓ひきまどへパツと飛ぶ。

「些ちと自分でもお働き、虫を取るんだよ。」

何も、肯分ききわけるのでもあるまいが、言ことばの下に、萩はぎの小枝を、花

の中へすらすら、葉の上はさらさら……あの撓たよたよ々とした細い枝

へ、堀の上、椿つばきの樹からトンと下りると、下りたなりにすつとすべと

って、ちよつと末を余して垂下る。すぐに、くるりと腹を見せ
 て、葉裏を潜つてひよいと攀じると、また一羽が、おなじように
 塀の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に撓つて、ぶら下
 るかと思うと、翻然と伝う。また一羽が待兼ねてトンと下りる。
 一株の萩を、五、六羽で、ゆさゆさ揺つて、盛の時は花もこぼさ
 ず、嘴で銜えたり、尾で跳ねたり、横顔で覗いたり、かくして、
 裏おもて、虫を漁りつつ、滑稽けてはずんで、ストンと落ちるか
 とすると、羽をひらひらと宙へ踊つて、小枝の尖へひよいと乗る。
 みなかみ
 水上さんがこれを聞いて、莞爾して勧めた。

「鞦韆を拵えてお遣んなさい。」

やしき
 邸の庭が広いから、直ぐにここへ気がついた。私たちは思いも

寄らなかつた。糸で杉箸すぎばしを結ゆわえて、その萩の枝に釣つつた。……
 この趣おもむきのを乗のりきで饒舌しゃべると、雀の興行をするようだから見合あわせる。
 が、鞆ぶらんこに乗のつて、瓢箪ひょうたんぶつくりこ、なぞは何でもない。時と
 すると、堀の上に、いま睦むつまじく二羽啄つんでいたと思う。その一羽
 が、忽然こつねんとして姿を隠す。飛びもしないのに、おやおやと人間
 の目にも隠れるのを、……こう搜もすと、いまいた堀の笠木かさぎの、す
 ぐ裏へ、頭を揉も込むようにして縦くに附く着ついているのである。脚が
 かりもないのに巧たくみなもので。——そうすると、見失みつた友の一羽
 が、怪訝けげんな様子で、チチと鳴き鳴き、其処そこらを覗のぞくが、その笠木
 のちよつとした出張でっぱりの咽のどに、頭が附く着ついているのだから、どつ
 ちを覗のぞいても、上からでは目に附くかない。チチツ、チチツと少しばら

時く捜して、パツと枇杷^{びわ}の樹へ飛んで帰ると、そのあとで、密^{そつ}と頭を半分出してきよろきよろと見ながら、嬉^{うれ}しそうに、羽を揺^ゆつて後から颯^{さつ}と飛んで行く。……惟^{おも}うに、人の子のするかくれんばである。

さて、こうたわいもない事を言っているうちに——前刻^{さつき}言つた——子どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出来るようになると、胸毛の白いのばかりを残して、親雀は何処^{どこ}へ飛ぶのかいなくなる。数は増しもせず、減りもせず、同じく十五、六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が実になり、雀の咽^{のど}が黒くなる。年々二、三度おんなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩^{はぎ}また椿^{つばき}、朝顔の花、露^{つゆ}草^{くさ}など

は、枝にも蔓つるにも馴なれ馴な染じんでいるらしい……と言うよりは、親雀から教えられているらしい。——が、見馴なれぬものが少しでもあると、可こ恐わがつて近づかぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退のいている。尤もも、時もつとにはこつちから、故わざとおいでごめんこうむの儀を御免蒙もる事がある。物もの干ほしへ蒲団ふとんを干す時である。

お嬢さん、お坊ちゃんたち、一家揃こつて、いい心こころ持もちになつて、ふつくりと、蒲団に団だん襪らんを試みるのだから堪たまらない。ぼとぼとと、あとが、ふんだらけ。これには弱る。そこで工夫をして、他所よそから頂戴して貯たくわえている豹ひょうの皮を釣ひつて置く。と枇び杷わの宿にいますくまつて、裏屋根へ来るのさえ、おっかなびつくり、（坊主びつくり貂てんの皮）だから面白い。

が、一夏ひとなつ えんにち縁日えんいちで、月見草つきみそうを買つて来て、萩はぎの傍そばへ植えた

事がある。夕月に、あの花が露にを香におわせてぱツと咲くと、いつも

この黄昏たそがれには、一時ひととき留とまり餌えに騒ぐのに、ひそまり返つて一羽

だつて飛んで来ない。はじめは怪あやしんだが、二日め三日めには心こ

ころづころづ着きいた。意気地いくじなし、臆病おくびょう。烏からす瓜うり、夕顔などは分けても知ち

かづき己おのれだろうのに、はじめて咲いた月見草の黄色な花が可恐こわいらし

い……可哀相かわいそうだから植替うえかえようかと、言ううちに、四日めの夕

暮頃やから、漸やつと出て来た。何、一度味をしめると飛とびついて露も

吸いかねぬ。

まだある。土手三番町どてさんばんちようの事を言つた時、卯うの花垣をなどと、

少々調子に乗つたようだけれど、まったくその庭に咲いていた。

土地では珍しいから、引越す時ひとえだ一枝折つて来てさし芽にしたのが、次第に丈たけたかく生おいた立ちはしたが、葉ばかり茂つぼみつて、蕾つぼみを持たない。丁ちようど十年目に、一昨年の卯月うづきの末にはじめて咲いた。それも塀を高く越した日ひあたり当のいい一枝だけ真白に咲くと、その朝から雀がバツタリ。意気地なし。また丁ちようどその卯の花の枝の下に御お飯まんまが乗っている。前年の月見草で心得て、この時は澄ましていた。やがて一羽そつずつ密そつと来た。忽たちまち卯の花に遊ぶこと萩たわむに戯たわむるが如しである。花の白いのにさえ怯おびえるのであるから、雪の降つた朝の臆病思おそうべしで、枇杷塚びわづかと言いいたい、むこうの真白の木の丘うづもに埋うづもれて、声さえ立てないで可あわれ哀である。

椿の葉を払つても、飛石の上を搔かきわ分けても、物干に雪の溶けか

かつた処へ餌を見せても影を見せない。炎天、日盛の電車道
 には、焦げるような砂を浴びて、蟪蛄の斧と言った強いのが普
 通だのに、これはどうしたものであろう。……はじめ、ここへ引
 越したてに、一、二年いた雀は、雪なんぞは驚かなかつた。山を
 兎が飛ぶように、雪を蓑にして、吹雪を散らして翔けたものを――
 |

ここで思う。その児、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、
 追続ぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪な
 どに対する、親雀の申しふくめが消えるのであろうと思う。

泰西の諸国にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の
 掌にも帽子にも遊ぶと聞く。

何故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさえ恐るるのであろう。実に花なればこそ、些とでも変った人間の顔には、渠らはおおい。は大なる用心をしなければならぬ。不意の礫の戸に当る事幾度ぞ。思いも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは数々である。

牛乳屋が露地へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今日は」を叫べば逃げ、大工が来たと見ればすくみ、屋根屋が来ればひそみ、晝屋が来ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道の何某は雀うちの老手である。並木づたいに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの約一千を下らないと言うのを見て戦慄した。

空氣銃を取つて、日曜の朝、ここの露地口に立つ、狩獵服の若い紳士たちは、失礼ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、隣家りんかの少年が空氣銃を求め得て高く捧げて歩行あるいた。隣家の少年では防ぎがたい。おつかいものは、ただ煎餅せんべいの袋だけでも、雀のために、うちの小母おぼさんが折入おりいつて頼んだ。親たちが笑つて、

「お宅の雀を狙ねらえば、銃を没収すると言いう約やく条じょうずみです。」
かつて、北越、倶利伽羅くりからを汽車で通つた時、峠の駅の屋根に、

車のとどろくにも驚かず、雀の日光に浴しつゝ、屋根を自在に、樋といの宿ではいに出入りするのを見て、谷に咲残さきめこつた撫子なでしこにも、火牛かぎゅうの修羅しゅらの巷ちまたを忘れた。——古戦場を忘れたのが可いいのではない。

忘れさせたのが雀なのである。

モウパッサンが普仏戦争ふふつを題材にした一篇の読みだしは、「巴里パリは包圍リイされて飢えつつ悶もだえている。屋根の上に雀も少くなり、下水ごみの埃も少くなった。」と言うのではなかったか。

雪の時は——見馴れぬ花の、それとは違つて、天地を包む雪であるから、もしこれに恐れたとなると、雀のためには、大地震以上の天変である。東京のは早く消えるから可いいものの、五日十日積るのにはどうするだろう。半歳はんさい雪に埋うもるる国もある。

或時あるときも、また雪のために一日形かたちを見せないから、……真個ほんとう

の事だが案じていると、次の朝の事である。ツイ——と寂しそうに鳴いて、目白鳥めじろが唯一羽ただ、雪を被かついで、紅くれないに咲いた一輪、寒かんつ

椿ばきの花に来て、ちらちらと羽も尾も白くしながら枝を潜くぐった。

炬燵こたつから見ていると、しばらくすると、雀が一羽、パツと来て、

おなじ枝に、花の上下うへしたを、一いつしよ所に廻まわった。続いて三羽五羽、

一いつとき斉いっせいに皆来た。御飯おまんまはすぐ嘴くちばしの下にある。パツパ、チイチイ

諸もろきおいに歓喜の声を上げて、踊りながら、飛びながら、啄ついばむと、

今度は目白鳥が中まじへ交まじった。雀同志は、突つつきあ合あつて、先を争あつて

狂くるつても、その目白鳥にはおとなしく優しくかった。そして目白鳥

は、欲ほしそうに、不思議そうに、雀の飯いを視ながめていた。

私は何故なぜか涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれよう。——親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教えられ、導かれて、雪の不安を忘れ

たのである。

それにつけても、親雀は何処どこへ行く。――

――去年七月の末であつた。……余り暑いので、愚ぐに返つて、
 こうどうも、おお暑いでめげては不可いけない。小児こどもの時は、日盛ひざかりに
 蜻蛉とんぼを釣つたと、炎天に打ぶつかる気で、そのまま日盛ひざかりを散歩し
 た。

その氣のついでに、……何となく、そこいら屋敷町の垣根を探
 して（ごんごんごま）が見たかつたのである。この名からして小
 児どもで可い。――私は大好きだ。スズメノエンドウ、スズメウリ、
 スズメノヒエ、姫百合ひめゆり、姫萩ひめはぎ、姫紫苑ひめしおん、姫菊ひめぎくの藤とうたけた称となえ

に對して、スズメの名のつく一列の雜草の中に、このごんごんごまを、私はひそかに「スズメの蠟燭ろうそく」と稱して、内々ひいき鼻屑ひいきでいる。

分けて、孟蘭盆うらぼんのその月は、墓はかもうで詣の田舎道、寺つづきの草

垣に、線香を片手に、このスズメの蠟燭、ごんごんごまを摘んだ
思出の可懷なつかしさがある。

しかもそのくせ、卑怯ひきようにも片陰かたかげを拾い拾い小さな社やしろの境けい
内いだの、心こころ当あたりの、邸やしきの垣根のぞを覗いたが、前年の生垣も煉瓦

にかわつたのが多い。——清水谷しみずだにの奥まで掃除が届く。——梅つ

雨ゆの頃は、闇黒くらがりに月の影がさしたほど、あつちこつちに目に着いた紫陽花あじさいも、この二、三年こつちもう少い。——荷車のあとに

は芽ぐんでも、自動車の轍わだちの下には生えまいから、いまは車前草おんばこさえ直ぐには見ようたつて間に合まわない。

で、何処どこでも、あの、珊瑚さんごを木乃伊みいらにしたような、ごんごんごまは見当らなかつた。——ないものねだりで、なお欲ほしい、歩ある行くうちに汗を流した。

場所は言うまい。が、向うに森が見えて、樹の茂つた坂がある。……私が覚えてからも、むかし道中の茶屋旅籠はたごのような、中庭をゆきぬ行ゆきぬ抜けに、土間へ腰を掛けさせる天麩羅茶漬てんぷらちやづけの店があつた。——その坂を下おりかかる片側に、坂なりに落おちこ込んだ空溝からみぞの広いのがあつて、道には破やぶれく朽くちた柵さくが結ゆつてある。その空溝を隔てた、葎むぐらをそのまゝ斜はすか違ちがひに下おりる藪垣やぶがきを、むこう裏はから這はつて、茂つ

て、またたとえば、めのう瑪瑙で刻んだ、ささ蟹がにのようなスズメの蝋燭が見つかつた。

つかまえて支えて、乗出のりだしても、溝に隔てられて手が届かなかつた。

スティッキエかきよ杖の柄で搔寄せようとするが、迂すべる。——がさがさと遣やつてい

ると、目の下の枝折戸しおりどから——こんな処ところに出入口があつたかと思

う——葎戸むぐらどの扉を明けて、円々まるまると肥つた、でつぷり漢ものが仰向あおむ

いて出た。きびらの洗いざらし、漆うるしもん紋はの兀はげたのを被きたが、

肥おおきつて大いから、手足も腹もぬつと露むきで出て、ちゃんちゃんを被はおつ

たように見える、逞たくましい肥大漢でつぷりものの柄がらに似合わず、おだやかな、

柔和な声して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾ってあげましようかな。」
 と言った。四十くらいの年配である。

私は一応挨拶あいさつをして、わけを言わなければならなかった。

「ははあ、ごんごんごま、……お薬用やくようか、何か禁厭ましなにでもな
 りますので？」

とにかく、路傍みちばただし、埃ほこりがしている。裏の崖境がけざかいには、清き
 浄れいなのが沢山あるから、御休息かたがた。で、ものの言いぶりと
 人のいい顔色かおつきが、気を隔おかせなければ、遠慮もさせなかった。

「丁ど午睡時ちよう ひるねどき、徒然とぜんでおります。」

導かるるまま、折戸おりどを入ると、そんなに広いと言うではないが、
 谷間の一軒家と言った形で、三方が高台の森、林に包まれた、ゆ

つくりした荒れた庭で、むこうに座敷の、縁が涼しく、油あぶら蟬ぜみ

の中に閑寂しずかに見えた。私はちよつと其処そこへ掛けて、会釈で済ます

つもりだったが、古畳で暑くるしい、せめてのおもてなしと、竹

のずんど切ぎりの花活はないけを持って、庭へ出直すと台所の前あたり、井

戸があつて、撥釣瓶はねつるべの、釣瓶つるべが、虚空へ飛んで猿のように撥はね

ていた。傍かたわらに青あお芒すすきが一叢ひとむら生おい茂しげり、桔梗ききようの早咲はやざきの花が

二、三輪、ただ初々ういういしく咲いたのを、荅つばみと一枝、三筋ばかり青

芒とりそを取添たけつえて、竹筒たけつに挿して、のつしりとした腰つきで、井戸

から撥釣瓶はねつるべでぎぶりと汲上げくみあ、片手の水差みずさしに汲んで、桔梗ききように

灌そそいで、胸はだかりに提さげた処ところは、腹まで毛だらけだったとこが、床

へ据えて、円い手で、枝ぶりをちよつと撓ためた形は、悠揚ゆうようとし

て、そして軽い手際てぎわで、きちんと極きまった。掛物かけものも何も見えぬ。

が、唯ただその桔梗の一輪が紫の星の照らすように据すわつたのである。

この待遇のために、私は、縁えんを座敷へ進まなければならなかった。

「麁茶そちやを一つ献じましょう。何事も御覧の通りの侘住居わびずまいで。：

…あの、茶道具を、これへな。」

と言うと、次の間まの——崖がけの草のすぐ覗く——竹簀たけすのこ子の濡ぬれえ

縁えんに、むこうむきに端居はしいして……いま私の入った時、一度てい

ねいに、お時誼じぎをしたまま、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなも

の、年とし紀ごろで視みて勿論もちろんお手玉ではない、糠ぬか袋ぶくろか何ぞせつ

せと縫ぬっていた。……島田しまだ髻つやつやの艶つやつや々しい、きやしやな、色白いろじろ

な女が立って手伝って、——肥大漢でっぶりものと二人して、やがて焔炉こんろを

縁側へ。……焚^{たき}つけを入れて、炭を継^ついで、土瓶^{どびん}を掛けて、茶盆を並べて、それから、扇子^{おあぎ}ではたはたと焔炉^{ひぐち}の火口を煽^{あお}ぎはじめた。

「あれに沢^{たくさん}山^{さん}ございます、あの、茂^{ところ}りました処^{ところ}に。」

「滝でも落ちそうな崖です——こんな町中に、あろうとは思われません。御閑静で実に結構です。霧が湧^わいたように見えますのは

。」

「鳥^{からすうり} 瓜^{うり}でございます。下^{した}闇^{やみ}で暗がりでありますから、日中

から、一杯咲きます。——あすこは、いくらでも、ごんごんごま

がございますでな。貴方^{あなた}は何とかおつしやいましたな、スズメの

蠟燭^{ろうそく}。」

これよりして、私は、茶の煮える間まと言うもの、およそこの編へんに記しるした雀の可愛さをここで話したのである。時々微笑ほほえんでは振ふ向りむいて聞く。娘か、若い妻か、あるいは妾おもいものか。世に美しい女の状さまに、一つはうかうか誘さそわれて、気の発奮はげんだ事は言うまでもない。さて幾度か、茶をかえた。

「これを御縁に。」

「勿論かさねまして、頃このごろ日に。——では、失礼。」

「ああ、しばらく。……これは、貴方あなた、おめしものが。」

……心こころづ着くと、おめしものも氣きは恥ずしい、浴衣ゆかただが、うしろの縫ぬいめが、しかも、したたか綻ほこびていたのである。

「ここもとは茅屋あばらやでも、田舎道ではありませんじゃ。尻端折しりばしより

……飛んでもない。……ああ、あんた、ちよつと繕つくろっておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓齒しらはにスツと含まれた。

「あなた……」

「ああ、これ、紅あかい糸で縫えるものかな。」

「あれ——おほほほ。」

私がのっそりと突立つったった裾すそへ、女の脊筋せすじが絡まつわったようになって、右に左に、肩を曲くねると、居勝手いがってが悪く、白い指がちらちら乱れる。

「恐縮です、何ともどうも。」

「こう三人と言うものくつつの附着いたのでは、第一わし私がこの肥ずうたい体じや。お暑たまさが堪らんわい。衣服きものをお脱ぎなさつて。……ささ、それが早い。——御遠慮があつてはならぬ——が、お身に合あいそうな着き替がえはなしじや。……これは、一つ、亭主が素すはだか裸あいなに相成ありましよ。それならばお心安い。」

きびらを剥はいで、すつぱりと脱はなぎ放はなした。 畚もっこ 褌ふんどしの肥でっ大ぷり裸はだ体かで、

「それ、貴方あなた。……お脱はなぎなすつて。」

と毛あむくじやらの大胡座おおあぐらを搔かく。

呆氣あつけに取られて立たちすくむと、

「おお、これ、あんた、あんたも衣きものを脱はなぎなさい。みな裸はだか体か

じや。そうすればお客人の遠慮がのうなる。……ははははは、それが何より。さ、脱ぎなさい脱ぎなさい。」

じょうだん
串 戯

にしてもと、私は吃驚して、言も出ぬのに、女はす

ぐに幅狭な帯を解いた。膝へ手繰ると、袖を両方へ引落して、

はばぜま

雪を分けるように、するりと脱ぐ。……膚は蔽うたよりふつくり

と肉を置いて、脊筋をすんなりと、撫肩して、白い脇を乳が覗

せすじ

なでがた

いた。それでも、脱ぎかけた浴衣をなお膝に半ば挟んだのを、お

つ、と這うと、あれ、と言う間に、亭主がずるずると引いて取っ

は

ま

はさ

た。

「はははは。」

と笑いながら。

既にして、朱鷺色ときいろの布ぬの一重である。

私も脱いだ。汗は垂たら々と落たらちた。が、憚はばりながら禪ふんは白しろい。

一輪ききようの桔梗ききようの紫の影に映はえて、女はうるおえる玉のようであつた。

その手が糸を曳ひいて、針をあやつつたのである。

縫ぬえると、帯をしめると、私は胸を折をるようにして、前のめり

に木戸口へ駈かけ出した。挨拶は済すましたが、咄とつ嗟さのその早はやさに、で

つぷり漢ものと女は、衣きものを引掛ひっかける間もなかつたろう……あの裸はだ体の

まま、井戸の前を、青すすきに、白く摺すれて、人の姿あやの怪ちようしい蝶

に似て、すつと出た。

その光景は、地獄か、極楽か、覺おぼ束つかない。

「あなた……雀さんに、よろしく。」

と女が莞爾にっこりして言った。

坂を駈かけあが上あつて、ほつと呼吸いきを吐ついた。が、しばらく茫然とし

てゐただんだ。——電車の音はあとさきに聞えながら、方角が分らな

かった。直下の炎天に目さえくらむばかりだったのである。

時に——目の下の森につつまれた谷の中から、一いっセイして、高

らかに簫しょうの笛が雲の峯に響いた。

……話の中に、稽古けいこの弟子も帰ったと言った。——あの主人は、

簫を吹くのであるか。……そういえば、余りと言えは見馴れない

風俗ふうだから、見た目をさえ疑うけれども、肥大でっぶり漢ものは、はじめか

ら、裸体はだかになつてまで、烏帽子えぼしのようなものをチョンと頭にのせ

ていた。

「奇人だ。」

「いや、……崖^{がけした}下のあの谷には、魔窟があると言う。……その
種々^{いろいろ}の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崖くず
れがあつて、大分、人が死んだ処^{ところ}だから。」――

と或友^{ある}たちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲労^{つかれ}には、みめよき女房の面^{おもて}が赤馬^{あかうま}の顔
に見えたと言う、むかし武士^{さむらい}の話がある。……霜^{しも}が枝に咲くよ
うに、汗――が幻を描いたのかも知れない。が、何故^{なぜ}か、私は、
……実を言えば、雀の宿にともなわれたような思いがするのであ

る。

かさねてと思う、日をかさねてひとつき一月にたらず、九月いちにち一日のあの大地震であつた。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつつ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、真夜まよ半なかかけて案じたが、家に帰ると、転げ落ちたまま底に水を残して、南なん天てんの根に、ひびも入らずに残った手水鉢ちようずばちのふちに、一羽、ちよんと伝つていて、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗のぞきに行つた。近づくとどろと胸は轟いた。が、ただ焼やけ原であつた。

私は夢かとも思う。いや、雀の宿の気がする。……あのおおおと大

漢このまる顔に、口許くちもとのちよぼんとしたのを思え。卯うの毛で胡ご粉ふんを刷はいたような女の膚はだの、どこか、頤あぎとの下あたりに、黒いあざはなかったか、うつむいた島田髻しまだの影のように――

おかしな事は、その時摘つんで来たごんごんごまは、いつどうしたか定かには覚ええないのに、秋雨あきさめの草に生えて、塀を伝っていたのである。

「どうだい、雀。」

知らぬ顔して、何にも言わないで、南天燭なんてんの葉に日の当る、小庭に、雀はちよん、ちよんと遊んでいる。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」川村二郎編、岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年12月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二、三羽——十二、三羽

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>